

BIRD RESEARCH NEWS

2015年1月号 Vol. 12 No. 1

お知らせ フィールド鳥類講座 ID-BIRD try 実施します

活動紹介 渡良瀬遊水地のチュウヒは減っている？

図書紹介 日本のクマゲラ

参加募集 冬鳥ウオッチ、冬鳥アンケートにご協力ください

研究誌 新着論文

生態図鑑 オオハクチョウ

海外情報 南フランスで繁殖分布を広げるミヤマガラス



Photo by Yoshiro Watanabe

お知らせ

フィールド鳥類講座 ID-BIRD try 実施します

守屋年史

バードリサーチではさまざまな参加型調査を提案しています。できるだけ多くの方に参加していただけるよう、識別しやすい種を対象にしたり、対象種を絞ったりと工夫していますが、技術や経験を必要とする場合も少なくありません。調査に参加したいけれど識別に自信がないために参加しにくいという方もおられるのではないかと思います。また、今まで調査というものをやったことがないので一人では手をつけにくい、まずは経験者と一緒に調査に参加してみたい、とお考えの方も多いのではないのでしょうか。

そこで、さまざまな環境で野外調査を行ない、各種の識別や調査方法を体験していただく企画「ID-BIRD try」をはじめることになりました。詳細は右記をご覧ください。

今回のトライ(試行)を踏まえて、内容を見直し、定例講座として確立していきたいと考えています。今回は試験的に関東圏で実施しますが、将来的にはほかの地域での開催も検討しています。

この企画は初心者の方にざっと野鳥を観察してもらうことを主目的としています。鳥類調査について体系的に学んでいただけるように計画しており、本格的な調査員養成講座にもつなげていきたいと考えています。ベテランの皆様にも講師役としてご意見、ご協力を仰げればと思っています。よろしくお願ひします。



実際に野外に出て、識別や調査方法を学びます。



● 毎回さまざまなフィールドをめぐる！

公園、里山、水辺、森林、高原など、毎回異なる環境で調査を体験していただきます。半年ほどかけて、可能な限り各フィールドのベストシーズンに実施する予定です。まずは種の識別のため、各種の特徴や鳴き声、どのような環境にいるのかなど、一般的な鳥類100種程度の野外観察ができればと考えています。

● 鳥類学も学べます(座学)

講座内容(予定)

- ◇ 識別(体の名称、換羽、鳴き声、識別点、類似種)
- ◇ 分類(分類体系、形質、DNAなど)
- ◇ 日本の鳥相(繁殖/非繁殖、渡り、固有種など)
- ◇ 生息環境
- ◇ 調査法(ラインセンサス・スポットセンサスなど)
- ◇ 研究紹介
- ◇ モニタリング(定期的な観察のすすめ)
- ◇ 野外活動のリスク管理(危険生物、天候判断)

● 日程・詳細

- 日程: 毎月第2・第4日曜日
- 場所: 随時ホームページでお知らせ(関東圏)
- 対象: 初心者を想定していますが、熟練者も歓迎。
- 計10回実施予定。通期でも、各回毎の参加もOK。
- 一定回数以上ご参加の方には修了証を発行!

第1回 2/22(日) 場所: 新宿御苑
身近な鳥の観察・機材の使い方・図鑑を引く・マイフィールドをつくろう

詳細はホームページで随時お知らせいたします。

http://www.bird-research.jp/1_event/index.html#id-bird

参加の申し込み・お問い合わせは守屋まで
moriya@bird-research.jp

活動報告

渡良瀬遊水地のチュウヒは減っている??

～長期的なねぐら調査から見てきたこと～

平野敏明

チュウヒは広大なヨシ原に生息する猛禽です。環境省のレッドリストでは絶滅危惧IB類に選定されていますが、日本での繁殖つがい数や越冬個体数について詳しいことはわかっていません。一方、越冬期にヨシ原の特定の場所に集団で就峙する習性があるため、ねぐらに集まるチュウヒを数えることで、その地域一帯の越冬数を正確に把握することが可能です。渡良瀬遊水地では、1994年から毎年、チュウヒの就峙個体数調査が行なわれてきました。現在この調査は、バードリサーチとNPO法人オオタカ保護基金の共同研究として継続しています。2014年度冬の調査として、今年の1月4日にも調査が実施されました。ここでは、21年間の調査から見てきた渡良瀬遊水地におけるチュウヒの就峙個体数の変化をご報告します。

2014年度冬は、2か所のねぐらで昨年と同じ数の合計21羽が記録されました。これまでの経過を見ると、2000年代初期までは30羽弱が記録されており、2003年度ごろから徐々に増加して2006年度と2007年度にはそれぞれ45羽、44羽が記録されています(図1)。2008年度に一旦減少したものの翌年から再び増加に転じ、2010年度には再び44羽が記録されました。しか

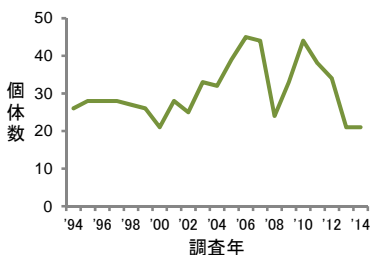


図1. 渡良瀬遊水地における21年間のチュウヒの就峙個体数の変動



写真1. 調査風景

Photo by 大塚啓子

し、ここ2年は21羽と少ない状態が続いています。

渡良瀬遊水地は、近年乾燥化が進みヤブマメなどの蔓性の植物で覆われたヨシ原が増えてきました。このような場所は、ヨシやオギが低く倒伏し地上がまったく見えず、チュウ

ヒの採食環境としてはあまり適していないと考えられます。実際、チュウヒの探餌飛行を観察していると、蔓性の植物に覆われたヨシの倒伏地はチュウヒがほとんど通過しません。また、早朝にねぐらから飛び立つチュウヒの多くが、渡良瀬遊水地の敷地外へ飛び去ることが観察されています。とすると、同遊水地のヨシ原の環境が悪化したことで、越冬個体数が減っているのかもしれませんが。ただし、2008年度も一時的に減少しその後回復していることから、今回も一時的な減少の可能性もあります。来シーズン以降もねぐら調査を続けることで、渡良瀬遊水地のチュウヒの現状がさらにはっきりするのではないかと考えています。

ところで、このような越冬個体数の変化は、渡良瀬遊水地だけの現象なのでしょうか。全国規模でのチュウヒの越冬状況の変化を把握するためには、他のところでも同様の調査を継続的に実施する必要があります。そこで、昨冬からバードリサーチの会員で日本野鳥の会岡山県支部の多田英行さんと筆者は、各地でチュウヒ類を観察されている方々と共同でねぐら調査や日中の個体数調査を実施しています。しかし、調査地数がまだまだ少ないのが現状です。日本全域の越冬個体数の変動を明らかにするために、みなさんにご協力いただければ幸いです。詳しくは多田英行氏 (v04075e@yahoo.co.jp) または平野 (hirano@bird-research.jp) までご連絡ください。

図書紹介

日本のクマゲラ

藤井忠志 著/北海道大学出版会 定価 2,800 円(税別)

日本最大のキツツキ、クマゲラ。日本では北海道と東北地方北部にしか生息しておらず、生息地や個体数の少なから環境省のレッドリストでは絶滅危惧II類に位置づけられ、国の天然記念物にも指定されています。クマゲラの調査研究に長年取り組んでこられた藤井忠志さんから、著書「日本のクマゲラ」を寄贈いただきましたのでご紹介します。



写真とともに解説され、さらにクマゲラの生息を脅かす要因や保護活動にも話は及びます。「クマゲラ物語」と題されたII部ではクマゲラ研究会の活動やそれに携わった人々の裏話が、III部では白神山地の世界自然遺産登録についての対談が収録されています。また、電柱に営巣しようとしたクマゲラやキツツキの語源など、興味深いコラムが散りばめられています。クマゲラについて知りたい方だけでなく、東北の自然や保全活動に興味のある方にもお勧めです。

【笠原里恵】

本書は本編となるI部と、資料編となるII部とIII部から構成されています。I部はクマゲラの研究史の紹介から始まります。江戸時代の記録までさかのぼると、なんとクマゲラは東北から関東一円に分布していた可能性があるそうです。次に詳細な繁殖生態や鳴き声の種類、営巣木や採餌木といった木の使い分けなどの生態学的な知見が貴重な生態

著者である藤井さんから嬉しいお知らせです！バードリサーチの会員であることを明記すると、2,700円(税込)、送料・振り込み手数料なしで購入可能です。ご希望の方は藤井さん (fujii@iwampus.jp) までご連絡ください。

参加募集

冬鳥ウォッチ、冬鳥アンケートにご協力ください

植田睦之

今年の冬鳥の様子はいかがですか？1月中旬に北海道の苫前に行っていたのですが、ユキホオジロがじっくり見られました。今年は北海道だけでなく、日本海側の各地からもユキホオジロを観察したという話を聞くので、多く飛来しているのかもしれないですね。

さて、もっと身近な冬鳥の渡来状況はどうでしょう。ぼくが見ているところでは、山には冬鳥が少ない、と思う反面、平地ではツグミをやや多く見るような気がします。

今冬の冬鳥の様子がわかる時期になってきましたので、今年も冬鳥の越冬状況をまとめたいと思います。バードリサーチでは、ある程度定量的に冬鳥の状況を記録する「冬鳥ウォッチ」と、皆さんの印象を記録として残しておこうという「冬鳥アンケート」の2つの調査を行っています。これらの調査から、一昨年は山に鳥が少な



写真. ツグミ
Photo by 内田博

く、低地に鳥が多かったこと、昨年は逆に山に鳥が多く、低地で少なかったことがわかりました。今年はどうなのでしょう。皆さんの情報をぜひお寄せください。

冬鳥ウォッチ

対象種: カシラダカ、マヒワ、アトリ、イスカ、ハギマシコ、カワラヒワ

内容: よく探鳥に出かけるフィールドで越冬期間に観察できた大まかな群れの数を記録するものです。マイフィールドをお持ちの方はぜひ、ご参加ください。

<http://www.bird-research.jp/1/fuyudori/>

冬鳥アンケート

対象種: ツグミ、シロハラ、ヤマガラ、ヒガラ、キクイタダキ、ウソ

内容: 観察地点と、対象種が少なかったか、例年どおりだったか、多かったかなどを選択するだけの簡単なものです。以下のHPより情報をご送信下さい。

<http://www.bird-research.jp/1/fuyudoriq.html>

研究誌 Bird Research 新着論文

青森県三沢市で同所的に繁殖したニューナイスズメとスズメ

蛭名純一・坂有希子・東信行・三上かつら

ニューナイスズメの営巣環境についてまとめた研究です。ニューナイスズメが営巣した場所は、水際に近い、草地にまばらに樹木がある場所で、森の縁に近い場所に設置した巣箱は使われず、開けた場所を好むのではないかと考えられました。でも、森の縁に近い場所のコゲラの古巣は使われていたということです。ニューナイスズメは巣箱よりコゲラの巣のような天然樹洞の方が好きなんですかね？



写真. ニューナイスズメ
Photo by 蛭名純一

渡良瀬遊水地における繁殖期のオオセッカの生息状況の変化と生息環境

平野敏明

渡良瀬遊水地でのオオセッカの生息数の変化についてまとめた研究です。ここでは2003年にはじめてオオセッカが確認されましたが、2007年から個体数の変化を調べたところ、2009年までは1~2羽程度だったのですが、2010年に8羽、2012年には15羽と急激に増加したそうです。増加の原因としては、日本の主要な繁殖地での個体数が増加したことや、渡良瀬でのヨシ焼の中止が影響している可能



写真. オオセッカ
Photo by 内田博

性が考えられます。このように増加したオオセッカですが、その後、2013年は11羽、2014羽には8羽と再び減少しています。オオセッカは生息環境にうるさい鳥で、八郎潟では環境の変化で急減してしまいました。渡良瀬は越冬するチュウヒも最近減少しているので、今後どうなるか、ちょっと心配ですね。

岡山県における越冬期のチュウヒとハイロチュウヒの渡来時期と個体数の季節変動

多田英行

チュウヒとハイロチュウヒの越冬数の季節変化を調べた研究です。チュウヒの越冬数は11月から3月まで比較的安定しているのですが、羽色や換羽状態などから個体識別して、個体の動きを見てみると、越冬個体は入れ替わっていて、その入れ替わりの激しさは年によって違っていることがわかりました。多田さんは寒波で北で越冬してきた個体の南下と、調査地の食物資源の変動、個体間の競争などが影響しているのでは、と考えています。このどれが原因なのかを突き止めるのはなかなか難しいですが、今後の調査の発展が楽しみです。



写真. チュウヒ
Photo by 小堀脩男

オオハクチョウ 英:Whooper Swan 学:Cygnus cygnus

1. 分類と形態

分類: カモ目カモ科

全長: 1279-1526mm 翼長: 560-648mm
 尾長: 160-216mm 嘴峰長: 92-116mm
 ふんばり長: 98-125mm 体重: 6750-12637.5g
 ※ 榎本 (1941) による。

羽色:

全身白色で、足は黒い。くちばしは先端が黒く、付け根から鼻孔の先まで黄色い。似ているコハクチョウでは黄色の部分より小さく、鼻孔の手前までが黄色い。幼鳥は全身灰色で、くちばしの成鳥では黄色い部分が薄いピンク色をしている。コハクチョウの幼鳥は同じ部分がより濃いピンク色。また秋の渡り当初はピンク色の部分が大きく、鼻孔よりさらに先まで届いている。この時期はコハクチョウとの識別が難しい。



写真1. 成鳥



写真2. 秋に飛来した頃の幼鳥(クッチャロ湖10月下旬)
Photo by 小西敦

鳴き声:

つがいのコミュニケーションなどで、お互いに首を交差させながらコオーコオーと大きな声で鳴き交わす。陸上や水面に群れているときには、コッココという小さめの声を出していることがある。

2. 分布と生息環境

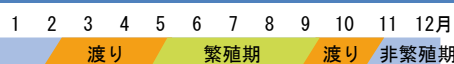
分布:

繁殖地はユーラシア大陸北部と周辺の島々で、西はアイスランド、東はロシア極東地域とアリューシャン列島西部まで分布している。主な繁殖環境はタイガ地帯だが、1980年代以降は極地のツンドラ地帯へも繁殖分布を広げている。越冬地は西ヨーロッパからアジアにかけてで、東アジアではカムチャツカ半島、日本、韓国、中国で越冬している。日本の越冬地は北海道東部から関東にかけての太平洋側で、特に福島県以北に数が多い。

生息環境:

繁殖地は乾燥帯のステップ(草原)からタイガの樹林帯、タイガからツンドラへの遷移帯までを利用し、水辺の近くで営巣する。越冬地では、内陸の湖沼や湿地、沿岸域を採食地やねぐらとして利用する。日本では刈り入れ後の水田でも採食する。

3. 生活史



繁殖システム:

一夫一婦で、どちらかが死ぬまでつがいが継続する。2~4歳でつがいが形成され、最初の繁殖は4~6歳で行われる。メスの方が成熟が早い。繁殖地で非繁殖個体は群

れを形成するが、群れのサイズは地域により異なり、10羽以下の場所から数百羽に達する場所まである。個体群に占める非繁殖個体の割合は高く、30~95%の個体が繁殖に参加しないか繁殖に失敗している。

巣:

付近の植物を使って、高さ41cm、底部直径1.1~2.8mほどの塚のように盛り上がった巣を作る (Brazil 2003)。

卵:

5月末から6月初めに産卵する。一腹卵数は4~5個。大きさは長径110mm、短径70mm、重さは約300g。

抱卵・育雛期間:

抱卵期間は31~35日で、メスが抱卵を行う。オスはほとんど抱卵しないが、巣やメスに近くものに対して防衛行動をとる。ヒナは早成性で、ふ化後2~3日で巣をから離れ、3か月ほど経つと飛べるようになる。親子は翌年の繁殖期前まで一緒に行動する。



写真3. オオハクチョウの家族

渡り:

秋は10月中下旬に北海道東部に飛来し始め、11月に入ると本州でも数が増えてくる。春は2月上旬に本州で数が減り始め、北海道では東部と北部で5月上旬まで姿が見られる。2009~2012年にかけて、屈斜路湖と伊豆沼・内沼で発信機を取り付けた47羽のオオハクチョウの追跡が行われた (Shimada et al. 2014)。伊豆沼・内沼のオオハクチョウ



は、春は雪解けを追って徐々に北上したが、秋の渡りでは北海道を経由せずにロシアの中継地から直接伊豆沼に飛来した。こうした中継地点の違いはあるが、追跡した個体はいずれも基本的には春と秋でほぼ同じルートを往復していた。また、北上川、風蓮湖、野付半島、網走湖、アニワ湾、アムール川河口が重要な中継地になっていること、そして森林からツンドラへの遷移帯であるインディギルカ川 (Indigirka) 中流域とコリマ川 (Kolyma) 下流域が繁殖地であることが判明した。

4. 食性と採食行動

日本で越冬しているオオハクチョウは、沿岸域ではアマモ、内陸湿地ではマコモやレンコン、湿地周辺の草本類を採食する。農地では水田の落ち籾や、トウモロコシの落穂

を食べる(嶋田 2007, 渡辺 2011, 渡辺ら 2008). ただし水田が主な採食地になっているコハクチョウに比べると, 自然の水辺環境で採食することが多いようだ.

イギリスでは, 20世紀前半までは湿地や沿岸で水生植物を採食していたが, 1960年代から頻りにジャガイモ畑や小麦畑で採食するようになった(Robinson *et al.* 2004). 農地での採食はヨーロッパの他の越冬地でも起きており, 後述するように個体数増加の一因となっている可能性がある.

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 個体数の増加

日本では1980年代から2000年代半ばにかけてオオハクチョウが増加し, 韓国でも1999年に越冬期調査が始まって以降, 2000年代は毎年増加傾向が続いていた. 極東ロシアの繁殖地では1990年代から繁殖域の拡大が確認されており, それまで森林からツンドラへの遷移帯に存在していた繁殖地が北上し, 北極圏でも繁殖するようになってきている(Syroechkovski 2002). 西ヨーロッパの越冬地や, 北欧やロシア西部の繁殖地でも個体数の増加が報告されている. 増加原因は完全には明らかでないものの, 越冬地において農地で採食するようになって栄養状態が改善されたこと, そして温暖化により, 越冬地の積雪が減少したこと, また繁殖地においても繁殖可能な期間や地域が拡大したことが指摘されている.

● 幼鳥が多い年は繁殖期の気温が高い年?

1983~2009年の青森県における幼鳥と成鳥の個体数と, 衛星追跡で分かっている渡りの中継地や, ロシアの繁殖地の気温と積雪などの気象条件を比較したところ, 繁殖地の5月の気温が高い年は, 青森県の越冬個体群の幼鳥率が大きく, 青森県における前年の積雪量が多い年には, 幼鳥率が低くなる傾向が見られた(図2)(Koyama *et al.* 2013). このことは間接的にだが, 長期的な気温上昇が繁殖成功に結びつくことを示唆している.

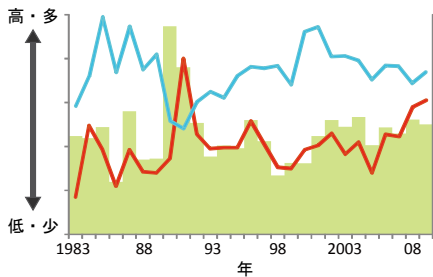


図2. 青森で越冬するオオハクチョウの幼鳥率 (■) と繁殖地の5月の気温 (●) および青森県の昨冬の積雪量 (■).

● 日本の越冬地の重要性

大陸にはハクチョウ類が越冬できる場所がもっと他にもありそうな気がするのだが, 東アジアで越冬するオオハクチョウの約8割とコハクチョウの約4割が小さな島国である日本で越冬する(図3). 韓国は冬の気候が寒冷なためか, コハクチョウはほとんど見られない. オオハクチョウは越冬しているが, 日本に比べると個体数は少ない. 中国では, 日本や韓国と同緯度の黄海沿岸の一部でオオハクチョウが越

冬しているが, 内陸では湖沼が凍結するためか, 大きな越冬地は見られない. 南へ下った長江中流域にはコハクチョウの越冬地がある(Cao *et al.* 2010). 中国のハクチョウ類は, 日本やヨーロッパのように採食地として農地を利用することがなく, 開発を免れた自然地域で見つかっていない. このことも, 広大な面積のわりには中国の越冬地が少ない理由だと考えられる.

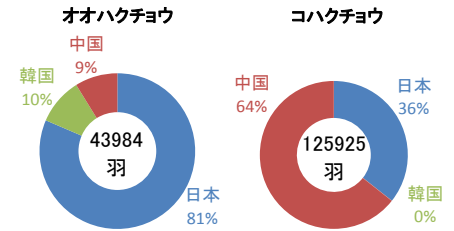


図3. 2005年1月の日本, 韓国, 中国のハクチョウ類の越冬個体数.

6. 引用・参考文献

Brazil, M. 2003. The Whooper Swan. T. & A.D. Poyster, London.

Cao, L., Zhang, Y., Barter, M. & Lei, G. 2010. Anatidae in eastern China during the non-breeding season: Geographical distributions and protection status. *Biological conservation* 143: 650-659.

榎本佳樹. 1941. 日本産鳥類の体の大きさ. 日本野鳥の会大阪支部, 大阪.

Gerasimov, N. N. 2001. Survey of Whooper Swan wintering in Kamchatka. *The Swans in Japan* 25: 26-29.

Koyama, K., Kasahara, S. & Abe, S. 2013. Effects of the climatic conditions of breeding, stopover and wintering sites on the number of juvenile Whooper Swans *Cygnus cygnus* wintering in Japan. *Ornithol. Sci.* 12: 107-115.

Robinson, J. A., Colhoun, K., Mcelwaine, J. G. & Rees, E. C. 2004. Whooper Swan *Cygnus cygnus* in Britain and Ireland 1960/61 - 1999/2000. *Waterbird Review Series*, The Wildfowl & Wetlands Trust/ Joint Nature Conservation Committee, Slimbridge.

嶋田哲郎. 2007. 水田生態系に於けるマガン, オオハクチョウの環境利用. 伊豆沼・内沼研究報告 1: 27-34.

Shimada, T., Yamaguchi, M. N., Hijikata, N., Hiraoka, E., Hupp, W. J., Tokita, K., Fujita, G., Uchida, K., Sato, F., Kurechi, M., Pearce, M. J., Ramey, M. A., Higuchi, H. 2014. Satellite tracking of migrating Whooper Swans *Cygnus cygnus* wintering in Japan. *Ornithol. Sci.* 13: 67-75.

Syroechkovski, E. 2002. Distribution and Population Estimates for Swans in the Siberian Arctic in the 1990s. *Waterbirds* 25 (Special Publication 1: Proceedings of the Fourth International Swan Symposium 2001): 100-113.

渡辺朝一. 2011. 越後平野弁天湖で観察したオオハクチョウの食餌植物3種. *新潟県生物教育研究会誌*. 46: 11-14.

渡辺朝一, 渡辺央, 山本明, 清水幸男. 2008. 池沼におけるガン・ハクチョウ類の食物としてのマコモの重要性と種による採食方法の違い. *日本鳥学会誌* 57: 97-107.

執筆者

神山和夫 バードリサーチ

バードリサーチでガンカモ調査のコーディネートをしています. 当初はそれほどハクチョウに関心はなかったのですが, 親子と一緒に暮らす姿を見て, じんわり好きになりました. 普段はハクチョウもおらず, カモも少ない東京で, パソコンに向かって, 皆さんから届くデータの整理をする毎日です.



海外情報

南フランスで繁殖分布を広げるミヤマガラス

菊地有子・高木憲太郎

会員の菊地有子さんに翻訳していただいた記事をもとにフランスの鳥類調査を紹介するコーナー。今回は、南フランスで繁殖地域を拡大しているミヤマガラスの論文をご紹介します。

南下するフランスの繁殖地

日本には冬鳥として渡来するミヤマガラスは、もともと九州地方とその周辺にのみ渡来していましたが、1980年代以降分布を拡大させ、現在では全国に渡来しています(高木2010)。ロシアと中国の間を流れるアムール川の流域や中国の三江平原などの開けた環境に点在する疎林で、小規模なコロニーを形成して繁殖し、日本へは10月頃に渡来します。春は3月頃から渡りはじめ、この頃には群れで上昇気流をつかんで高く高く昇る様子が見られるようになります。5月になっても残っている個体が観察されることがありますが、若鳥であることが多く、国内で繁殖が確認されたことはありません。北海道の気候は、ミヤマガラスにとっては暑すぎるのでしょうか？これからご紹介する南フランスのプロバンス地方やラングドック・ルシヨン地方の緯度はまさに北海道と一緒です。

論文の著者であるオリオゾさんは、1859年の記録として、「南フランスでは冬にまれにミヤマガラスが渡来することがあるが、それらは幼鳥で、繁殖はしていない」という記述を紹介しており(Olios 2014)、フランスでは北部でのみ繁殖していたようです。ところが、1960年代に入ると分布が南へと拡大し始めました。プロバンス地方とラングドック・ルシヨン地方の間を北から南に流れるローヌ川の上流部でコロニーが確認されたのが1965年のこと。その後、ローヌ川に沿ってミヤマガラスの繁殖分布は南下し、1998年、プロバンス地方の最初のコロニーとなる、ブッシュ・ド・ローヌ県での1~2つがいの繁殖が観察されました。そして翌年の1999年には、ヴォークリューズ県で13つがいが確認されました。

その後はローヌ川沿いにコロニーが増えていき、ラングドック・ルシヨン地方では、地中海沿岸部に沿って南下。フ



写真. ヨーロッパのミヤマガラス。日本に渡来するものとは亜種が異なる。

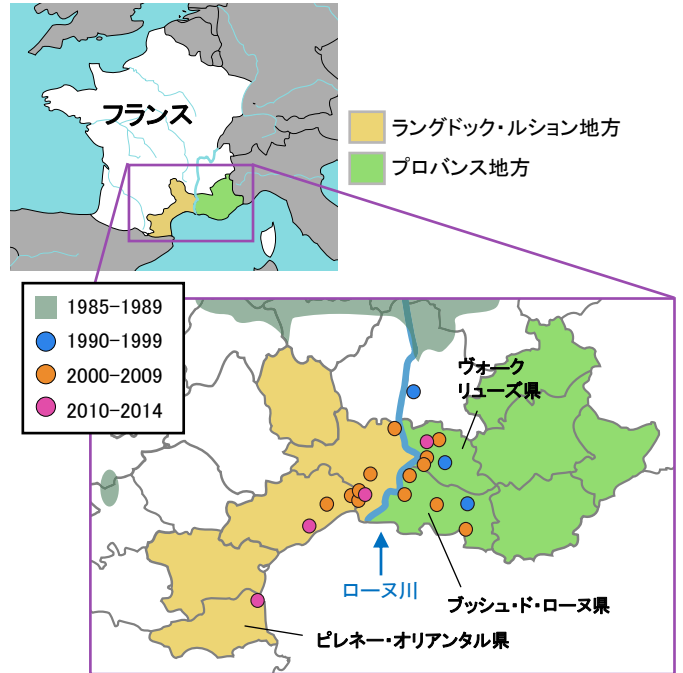


図. フランス南部におけるミヤマガラスのコロニーの分布。

ランスで最も南に位置し、札幌とほぼ同緯度のピレネー・オリアンタル県では、まだコロニーは発見されていないものの、2014年に成鳥から給餌を受けている幼鳥が観察されました。このことから、この年に同県でミヤマガラスが繁殖したのは間違いなさだろうとオリオゾさんは考えています。

南フランスの事例に学ぶ

フランスではもともと北部で繁殖していたので、そこから陸伝いにじりじりと繁殖分布を広げていったようです。では、北海道はどうでしょうか？フランスとは違い北海道と繁殖地である大陸との間には日本海が横たわっており、このことがミヤマガラスにとって大きな障壁となっているのかもしれませんが、しかし一方で、防風林が点在する北海道の牧草地帯は、ミヤマガラスが好んで繁殖する環境だと思われます。いずれ日本海を越えて、北海道でミヤマガラスの繁殖が見られるようになるかもしれませんね。南フランスでは、数ペアから数十ペアというごく小規模なコロニーから繁殖が始まったようです。繁殖期に街路樹や防風林でヒラヒラ舞うカラスの小さな群れが見られたら、ご注意ください。

Olios, G. 2014. Expansion du Corbeau freux *Corvus frugilegus* dans le midi méditerranéen français. *Ornithos* 21:249-253.

高木憲太郎. 2010. 日本におけるミヤマガラスの越冬分布の拡大. *Bird Research* 6: A13-A28.